

中国の中学生におけるストレス、ストレス反応 及びソーシャルサポートの地域特性：雲南省昆明市 と内モンゴル通遼市の中学生の比較を通して

鉄, 拳
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18446>

出版情報：九州大学心理学研究. 11, pp.63-69, 2010-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

中国の中学生におけるストレスラー，ストレス反応 及びソーシャルサポートの地域特性

— 雲南省昆明市と内モンゴル通遼市の中学生の比較を通して —

鉄 拳 九州大学大学院人間環境学府

The stressors and stress reactions of the students in Chinese junior school and the regional characteristic of social support: Through comparison of the junior school students in Kun-Ming City of Yun-Nan province and Tong-Liao City of Inner Mongolia province

Ken Tetsu (*Graduate School of Human - Environment Studies, Kyushu University*)

This paper examined regional characteristics of stress in junior high school students in Yun-Nan and Inner Mongolia. The result showed that the frequency and strength of stressor in Yun-Nan is higher than Inner Mongolia. Social support for students in Inner Mongolia's is higher than those for Yun-Nan. However, there is no significant difference in stress response between students in Yun-Nan and Inner Mongolia. It is considered that students in Yun-Nan managed stress better and less likely to show stress response. Also, they received more social support from friends, comparing to students in Inner Mongolia. Furthermore, comparison between subscales of the questionnaire, differences in expression of stress reaction were found between students in the two provinces. Since the present results were based on questionnaire investigation, interview study is necessary in the future, in order to understand the students' situation and compare with the quantitative data. Also further study in different regions to understand regional characteristic is necessary.

Key Words: junior school students, stressors, stress reactions, social support

1. 問題と目的

思春期・青年期は心身ともに成長が著しく、自分自身の様々な変化や周りの環境に非常に敏感になる時期である。学校で過ごす時間は一日の大半を占めるこの時期は特に、学校での様々な出来事が児童生徒の心身の健康に大きな影響力を与えていると考えられる(松崎・小林, 2004)。

児童生徒のストレスが生じるプロセスは、ストレスラーの経験、ストレスラーに対する認知的評価、コーピング、ストレス反応の表出、という4つの段階があることが明らかにされている。

学校ストレスラーとは、児童生徒が学校生活を送る上で意識的または無意識的に受けているストレスラーのことで、教師や友人との対人関係から受けるストレスラー、先輩・後輩の人間関係の問題から受けるストレスラー、授業中や進路選択・決定などの学業に関するストレスラー、規則に関するストレスラーなどがあげられる(岡安, 1992)。三浦・坂野(1996)によると、これらの学校ストレスラーやストレスラー認知の違いによってストレス反応の表出の程度や様相に違いが見られることが明らか

になっている。

日常の学校生活において観察される様々なストレスラーのうち、中学生は「教師との関係」、「友人関係」、「部活動」など人間関係に関する出来事を特にストレスフルであると感じているということが明らかにされている(岡安, 嶋田, 丹羽, 森, 矢富, 1992)。また、友人関係においてストレスを高く評価している中学生は、抑うつ、不安反応を示す傾向の高いことが報告されている(岡安, 嶋田, 坂野, 1993)。児童生徒が学校で適応した生活を送るためには、人間関係にかかわる問題を解決することが重要であると考えられることができる。

永田(2005)は中学生の主なストレスラーは学業、部活動、家族、教師との関係、友人関係の順で強い。学業と部活動は小学校と比較し、最も環境が変化すると考えられるからである。このような中学生のストレス状況ではソーシャルサポートが適切なコーピングを促し、ストレスを軽減することに影響を及ぼしていると指摘している。

ストレス反応に個人差があるため、心理的ストレス反応がどのように生じるかを考えたとき、その原因をストレスラーにさらされた経験だけに限定することは難しい。

Table 1
各地区普通初中（中学校）基本情况
（2006年中国統計年鑑）

| 地区 | 学校数 | 募集生数 | 在校生数 | 卒業生数 | 専任教師 |
|-------|------|--------|---------|--------|--------|
| 内モンゴル | 1125 | 303378 | 990473 | 334285 | 66258 |
| 雲南省 | 1814 | 655668 | 1901616 | 635183 | 104419 |

そして、ストレス反応の個人差の問題に関して、ストレス研究では、ストレス過程における様々なストレス緩衝要因の影響が重視されている。そして、代表的な緩衝要因の一つとしてソーシャルサポートが指摘されている。

中国では、小学生には1日10時間の睡眠時間を保証するように規定されているが、全国の児童の71.4%がそれに達していない。2007年3月24日、中国国内のメディアの報道によると、上海市の83.3%の小学生が睡眠不足であり、睡眠不足の小学生が他の都市に比べてはるかに多いという。睡眠不足や睡眠障害があると、遅刻や校則違反など、学校への適応能力が低下しがちで、さらには、人間関係の悪化などの思春期の非行につながる恐れがある。

雲南省は中国の最西南部に位置し、最も多い少数民族は彝族で、400万を越えている。省の政府工作報告によれば、2004年の全省生産総額（GDP）は対前年比11.5%増の2959.5億人民元であった。雲南第五回人口調査広報2002年1月7日雲南省統計局によると、6歳及び6歳以上の人口の中に初等教育（中学校）の人口は899.4万人、約23.53%。2000年の6歳及び6歳以上の人口の中に教育を受けていない人は515.8万人である。2005年の15歳及び15歳以上の人口の中の教育を受けていない人の比率は20.07%である（中国統計年鑑）。

内モンゴルは東西に長く伸びており、内モンゴル自治区と名のつくものの、現在は漢族が80%以上を占め、その他モンゴル族、ダウール族などが居住している。人口23,840,000人（23位）（2004年）、GDP（2007年）6,019億元（17位）。中国統計年鑑によると、2000年の初等教育（中学校）の人口は811.7万人、約37.2%。2000年の6歳及び6歳以上の人口の中に教育を受けていない人は218.7万人である。2005年の15歳及び15歳以上の人口の中の教育を受けていない人の比率は11.59%である（中国統計年鑑）。

Table 1で示したように、各地区普通中学校の基本情況からみると雲南省において学校数がやや多いもの、在学生徒数が2倍くらい多く、教師数も比較的に少ないことが分かる。また、専任教師一人当たりの指導生徒数は内モンゴルが15人、雲南省は18.2人である。さらに、15歳及び15歳以上の人口の中の教育を受けていない人の比率は雲南省が内モンゴルに比べて約9%多くなって

いることなどから雲南省の児童生徒が学校施設や教育費用においてより厳しい環境の中において、教育を受けていると思われる。

中国は面積が余りに広く、自然的、地理的条件においても経済的・政策的な環境においても、必ずしも均質ではない。中国国内の各地域は法制度、政策や地域制度などは国家の統一的な統制によって類似点が多くあるが、それ以外での社会習慣や文化あるいは経済状況などはまだ多くの違いがあると思われる。従って生徒達を取り巻く社会環境、学校環境においてストレスとなること、あるいは、ストレスに対応する仕方やストレスに関する捉え方は地域によって違いがあることが推測される。そこで、本研究では中国の中学生の上述の“ストレス”の在り方などについての地域特性を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

対象：中国の内モンゴル自治区通遼市と雲南省昆明市二ヶ所の中学生1~3年生

内モンゴルで回収した用紙が398名分あったが、分析項目すべてに回答した者だけを分析対象者とした。その結果370人であった。昆明で回収した用紙が254名分あったが、分析項目すべてに回答した者だけを分析対象者とし、その結果241人であった。

使用尺度：

「ストレス尺度」：中学生を対象としたストレス尺度（岡安・嶋田・坂野，1993）などを参考に、学生時代に日常的に生じると思われるような出来事からなる、28項目のストレス項目を作成した。項目内容としては、授業や勉強に対するストレス、先生に対するストレス、友人関係に対するストレス、親に対するストレス、その他、学校生活に関わるストレス（中国で部活がないため、部活に関する項目は外した）から構成されている。回答方法としては、その出来事に関する経験頻度（全然なかった～よくあった）の4段階と、不快感（全然いやでなかった～非常にいやであった）の4段階について解答させる。

「ソーシャルサポート尺度」：児童生徒を対象としたソーシャルサポート尺度（岡安・嶋田・坂野，1993；本田，2004）などを参考に、15項目のソーシャルサポートを作成した。この尺度では、自分を理解してもらう尺度、具体的な援助やアドバイスを受ける尺度について、父親、母親、教師、友人それぞれから「全くそう思わない～とてもそう思う」の4段階で測定する。

「ストレス反応尺度」：鉄（2005）が中国で用いた尺度を使用する。内容は抑うつ感、疲労感、身体反応、不機嫌・怒り反応からの21項目から構成している。回答方

法として「全くない～いつもある」まで5段階で測定する。

3. 結果

ストレス反応尺度項目に対し、因子分析（因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法）を行い、同一の解釈が可能な4因子が抽出された（Table 2）。第1因子は「自分で自分を嫌がる」「自分が他人より劣っている気持ちになる」など4項目に対して負荷量が高く、「自己嫌悪感」に関する因子とした。第2因子は、「感情の起伏が激しい」「攻撃的になる」など4項目に対して負荷量が高く、「不機嫌・怒り反応」に関する因子とした。第3因子は、「頭が痛い」「特に病気ではないのに熱が出る」など5項目に対して負荷量が高く、「身体反応」に関する因子とした。第4因子は、「疲れやすい」「特に病気ではないのに体がだるい」など2項目に対して負荷量が高く、「疲労反応」に関する因子とした。

ストレッサー頻度尺度項目に対し、因子分析（因子抽出法：アルファ因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法）を行い、同一の解釈が可能な4因子が抽出された（Table 3）。第1因子は「先生から無視された」「授業の内容が分からなかった」など10項目に

して負荷量が高く、「学校一般」に関する因子とした。第2因子は、「学校でいじめられた」「友達と喧嘩した」など5項目に対して負荷量が高く、「友人関係」に関する因子とした。第3因子は、「家の手伝いをするように言われた」「親が自分の要求を聞いてくれなかった」など4項目に対して負荷量が高く、「親関係」に関する因子とした。第4因子は、「学校の行事などで皆と行動する」「学校で気の合わないクラスメートと一緒に行動した」など2項目に対して負荷量が高く、「集団行動」に関する因子とした。

ストレッサー強度尺度項目に対し、因子分析（因子抽出法：アルファ因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法）を行い、同一の解釈が可能な4因子が抽出された（Table 4）。第1因子は「授業の内容が分からなかった」「自分の将来について悩んだ」など9項目に対して負荷量が高く、「学校一般」に関する因子とした。第2因子は、「親が自分の要求を聞いてくれなかった」「親に叱られた」など6項目に対して負荷量が高く、「親関係」に関する因子とした。第3因子は、「学校で気の合わないクラスメートと一緒に行動した」「学校の行事などで皆と行動する」など2項目に対して負荷量が高く、「集団行動」に関する因子とした。第4因子は、「仲のいい友達とあることでうまくいかなかった」「気の合う友達がなかなかできなかった」など4項目に対して負荷

Table 2
ストレス反応尺度の因子構造（プロマックス回転後）

| 項 目 a(.899) | 因子負荷量 | | | | 共通性 |
|----------------------|-------|-------|-------|-------|------|
| | F 1 | F 2 | F 3 | F 4 | |
| 自分で自分が嫌になる | .997 | -.165 | -.016 | -.039 | .412 |
| 自分が他人よりもおとっている気持ちになる | .770 | -.087 | .045 | -.011 | .443 |
| 自分が悪い事をしている気持ちになる | .595 | .218 | -.037 | -.031 | .498 |
| みじめな気持である | .534 | .168 | -.046 | .197 | .402 |
| 感情の起伏が激しい | -.041 | .816 | -.079 | .028 | .405 |
| 攻撃的になる | -.024 | .773 | .006 | -.114 | .370 |
| 気持ちがしずむ | .068 | .700 | -.039 | .007 | .575 |
| イライラする | .085 | .664 | .004 | -.039 | .448 |
| 頭が痛い | .043 | -.139 | .758 | .023 | .532 |
| とくに病気ではないのに熱が出る | .063 | -.055 | .714 | -.076 | .742 |
| とくに病気ではないのに咳が出る | -.070 | -.014 | .698 | -.017 | .410 |
| めまいがする | -.065 | .220 | .458 | .061 | .458 |
| 胸やけがする | .121 | .095 | .448 | .024 | .499 |
| 疲れやすい | .037 | -.162 | -.043 | 1.041 | .532 |
| とくに病気ではないのに体がだるい | -.041 | .202 | .120 | .485 | .567 |
| a 係数 | .84 | .81 | .78 | .75 | |
| 累計寄与率 (%) | 37.33 | 43.20 | 46.71 | 49.68 | |

Table 3
 ストレッサー頻度尺度の因子構造 (プロマックス回転後)

| 項 目 | 因子負荷量 | | | | 共通性 |
|-------------------------|-------|-------|-------|-------|------|
| | F 1 | F 2 | F 3 | F 4 | |
| a(.851) | | | | | |
| 先生から無視された | .635 | .077 | .007 | -.127 | .245 |
| 授業の内容がわからなかった | .612 | .084 | -.025 | -.128 | .176 |
| 先生が自分を理解してくれなかった | .591 | .151 | .007 | -.088 | .237 |
| 自分の将来について悩んだ | .579 | -.022 | -.152 | .140 | .253 |
| 気の合わない先生がいた | .556 | -.150 | .184 | -.068 | .376 |
| 授業の内容に興味がもてなかった | .539 | -.100 | .243 | -.131 | .294 |
| やりたいことがなく、たいくつだった | .529 | .028 | .084 | .005 | .295 |
| 先生から期待されるような成績が取れなかった | .497 | .136 | -.180 | .035 | .299 |
| 自由な時間がすくなかった | .488 | -.068 | .078 | .216 | .272 |
| 朝起きてから登校の準備が面倒だった | .421 | .001 | .070 | -.012 | .334 |
| 学校でいじめられた | -.088 | .589 | .119 | -.127 | .326 |
| 友たちとけんかをした | .049 | .541 | -.021 | .032 | .311 |
| 仲のよい友たちとあることでうまくいかなかった | .139 | .500 | -.018 | -.016 | .221 |
| 友たちから自分の悪いところを言われた | -.049 | .487 | .092 | .055 | .362 |
| 友たちに自分のこと間違っって理解された | .043 | .476 | .000 | .110 | .209 |
| 家の手伝いをするよういわれた | -.085 | .123 | .489 | -.004 | .372 |
| 親が自分を理解してくれなかった | .152 | .055 | .456 | .080 | .329 |
| おこづかいが足りなかった | .141 | .049 | .435 | -.014 | .213 |
| 親が自分の要求を聞いてくれなかった | .085 | -.039 | .410 | .119 | .276 |
| 学校の行事などでみんなで行動する | -.158 | .015 | .005 | .638 | .441 |
| 学校で気の合わないクラスメートと一緒に行動した | -.043 | .063 | .103 | .512 | .420 |
| a 係数 | .82 | .68 | .61 | .60 | |
| 累計寄与率 (%) | 20.28 | 24.16 | 27.27 | 29.70 | |

Table 4
 ストレッサー強度尺度の因子構造 (プロマックス回転後)

| 項 目 | 因子負荷量 | | | | 共通性 |
|-------------------------|-------|-------|-------|-------|------|
| | F 1 | F 2 | F 3 | F 4 | |
| a(.889) | | | | | |
| 先生から期待されるような成績が取れなかった | .794 | -.099 | -.152 | .051 | .528 |
| 授業の内容がわからなかった | .763 | -.137 | .011 | -.004 | .363 |
| 自分の将来について悩んだ | .696 | -.049 | .166 | -.167 | .504 |
| 先生から無視された | .615 | .059 | -.051 | .073 | .279 |
| 授業の内容に興味がもてなかった | .567 | .099 | .121 | -.094 | .387 |
| 先生が自分を理解してくれなかった | .557 | .084 | -.100 | .226 | .373 |
| 試験や成績のことが気になった | .554 | -.025 | .215 | -.183 | .303 |
| やりたいことがなく、たいくつだった | .499 | .052 | .110 | .073 | .334 |
| 先生に叱られた | .484 | .215 | -.088 | .039 | .239 |
| 親が自分の要求を聞いてくれなかった | -.054 | .821 | -.109 | -.023 | .283 |
| 親にしかられた | .102 | .764 | -.094 | -.159 | .374 |
| 親が自分の成績をかなり期待していた | .075 | .637 | .000 | -.164 | .331 |
| 家の決まりを守らなければならなかった | -.026 | .548 | .116 | -.001 | .496 |
| 親が自分を理解してくれなかった | .041 | .511 | -.017 | .153 | .295 |
| 家の手伝いをするよういわれた | -.228 | .431 | .220 | .109 | .411 |
| 学校の行事などでみんなで行動する | .003 | -.025 | .735 | -.045 | .341 |
| 学校で気の合わないクラスメートと一緒に行動した | -.071 | .051 | .525 | .164 | .388 |
| 仲のよい友たちとあることでうまくいかなかった | .066 | -.104 | .029 | .690 | .463 |
| 学校でいじめられた | -.121 | -.004 | .097 | .556 | .303 |
| 友たちとけんかをした | .321 | -.047 | -.111 | .472 | .139 |
| 気の合う友達がなかなかできなかった | .104 | -.085 | .223 | .415 | .404 |
| a 係数 | .86 | .78 | .70 | .65 | |
| 累計寄与率 (%) | 27.79 | 33.01 | 36.46 | 38.56 | |

Table 5
ソーシャルサポート尺度の因子構造 (プロマックス回転後)

| 項目 | 因子負荷量 | | | |
|---|-------|-------|-------|------|
| | F 1 | F 2 | F 3 | 共通性 |
| a(.848) | | | | |
| 一緒に遊びに出かけたりする | .778 | -.058 | -.196 | .453 |
| 同じような関心や興味を持っている | .703 | -.109 | -.046 | .381 |
| あなたの悩みについて話し合ってくれる | .651 | .156 | -.102 | .502 |
| あなたが誰かにいやなことを言われたときに、なぐさめてくれる | .510 | .040 | .231 | .474 |
| あなたの話を、いつもよく聞いてくれる | .446 | .020 | .244 | .387 |
| ケガや病気のときに心配してくれる | -.136 | .902 | -.093 | .561 |
| あなたがよい成績をとったり、試合に勝ったりしたとき、心からおめでとうといってくれる | -.070 | .777 | .025 | .566 |
| あなたのよいところも、悪いところも、よくわかってくれる | .131 | .538 | .055 | .455 |
| あなたが元気がないとき、はげましてくれる | .171 | .500 | .142 | .547 |
| 進路や勉強のことでアドバイスしてくれる | -.140 | -.047 | .763 | .451 |
| あなたの間違っているところ、悪いところを指摘してくれる | -.084 | .097 | .589 | .391 |
| a 係数 | .81 | .77 | .60 | |
| 累計寄与率 (%) | 36.47 | 44.47 | 46.83 | |

Table 6
ストレス反応下位尺度比較結果

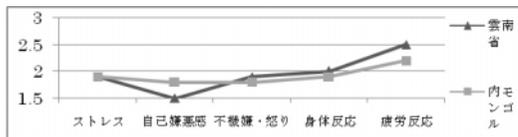
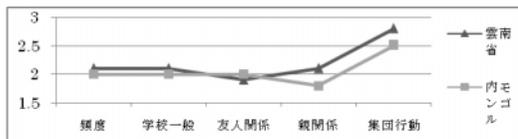


Table 7
ストレッサー - 頻度比較結果



量が高く、「友人関係」に関する因子とした。

ソーシャルサポート尺度項目に対し、因子分析 (因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法) を行い、同一の解釈が可能な3因子が抽出された (Table 5)。第1因子は「同じような関心興味をもっている」「一緒に遊びに出かけたりする」など5項目に対して負荷量が高く、「共行動的サポート」に関する因子とした。第2因子は、「怪我や病気の時に心配してくれる」「あなたがいい成績をとったり、試合に勝ったりしたときに心からおめでとうと言ってくれる」などに5項目に対して負荷量が高く、「情緒的サポート」に関する因子とした。第3因子は、「進路や勉強のことでア

ドバイスしてくれる」「あなたの間違っているところ、悪いところを指摘してくれる」など2項目に対して負荷量が高く、「現実的サポート」に関する因子とした。

比較結果

両地域のストレス反応尺度の比較を行うため、分散分析を行った結果、ストレス反応全体では両地域の間は有意差は見られなかった。そこで、下位尺度での比較を行ったところ第1因子の「自己嫌悪感」では内モンゴルの方が有意に高いことが示され ($F(1,609) = 20.7, P < .01$)、第4因子の「疲労反応」においては雲南省の方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 17.56, P < .01$)。第2因子の「不機嫌・怒り反応」と第3因子の「身体反応」因子において有意差は見られなかった (Table 6)。

ストレッサー頻度尺度においては、雲南省の方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 12.62, **$)。下位尺度の比較では「学校一般」、「親関係」、「集団行動」因子においては雲南省の方が高いことが示され ($F(1,609) = 5.11, P < .05$) ($F(1,609) = 61.04, P < .01$) ($F(1,609) = 21.75, P < .01$)、「友人関係」因子においては内モンゴルの方が高いことが示された ($F(1,609) = 4.31, P < .05$) Table 7。

ストレッサー強度の比較においては雲南省の方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 7.79, **$)。下位尺度の比較では親関係因子においては雲南省の方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 101.79, **$)。学校一般、友人関係及び集団行動因子においては両地域に差は見られなかった Table 8。

ソーシャルサポートにおいては内モンゴルの方が有意

Table 8
ストレス - 強度比較結果

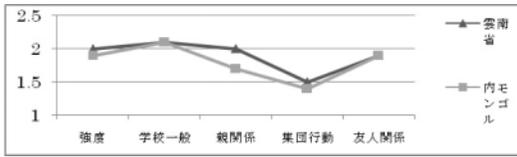


Table 11
母親におけるサポ - トの比較結果

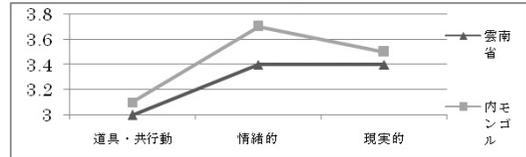


Table 9
ソ - シャルサポ - トの比較結果

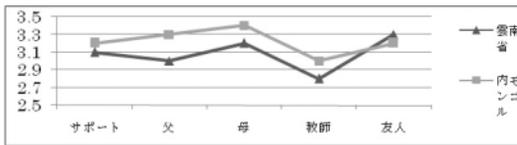


Table 12
教師におけるサポ - トの比較結果

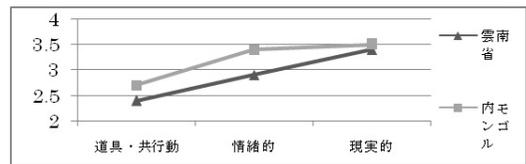


Table 10
父親におけるサポ - トの比較結果

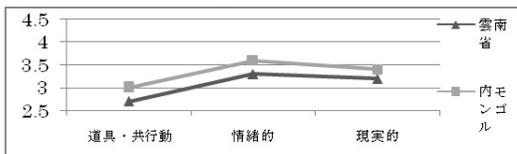
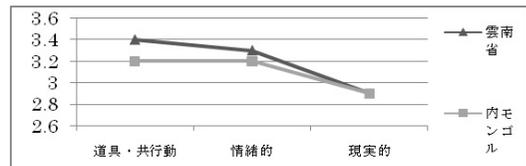


Table 13
友人におけるサポ - トの比較結果



に高いことが示された ($F(1,609) = 17.45, **$)。下位尺度の比較では友人からのサポートにおいては雲南省の方が有意に高いことが示され ($F(1,609) = 6.69, **$)、それ以外の父、母及び教師からのサポートでは内モンゴルの方が高いことが示された ($F(1,609) = 26.14, **$) ($F(1,609) = 10.07, **$) ($F(1,609) = 36.17, **$) Table 9。

ソーシャルサポートの対象別の下位尺度の比較では、父親からの共行動的、情緒的及び情動的サポートの3因子において内モンゴルの方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 26.14, **$) Table 10。

母親からの共行動的、情緒的サポートにおいて内モンゴルの方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 10.07, **$)。情動的サポートにおいては差は見られなかった (Table 11)。

教師からの共行動的、情緒的サポートにおいて内モンゴルの方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 36.17, **$)。情動的サポートにおいては差は見られなかった (Table 12)。

友人からの共行動的、情緒的サポートにおいて雲南省の方が有意に高いことが示された ($F(1,609) = 6.69, **$)。情動的サポートにおいては差は見られなかった (Table 13)。

4. 考 察

ストレス源頻度と強度の比較においては雲南省の方が高いことが示された。ソーシャルサポートの比較において、内モンゴルの方が雲南省より高いことが示された。だが、ストレス反応の比較では両地域間には有意差は見られなかった。雲南省の学生達が学校内要因、友人関係、親との関係、集団での行動からくるストレス源を内モンゴルの学生と比較してより多く経験している。また、そういったストレス源をより多く感じており、その上、ソーシャルサポートが内モンゴルの学生ほど高くないことからストレス反応はより高いことが考えられるが、結果はストレス反応尺度全体では高くないことが示された。しかし、感じているストレス源のストレス反応の表出の在り方が異なることが伺われる。すなわち、雲南省では「疲労感」が高く、内モンゴルでは「自己嫌悪感」が高くなっているということである。

ストレス源の頻度では、先生から無視された、授業の内容がわからなかった、先生が自分を理解してくれなかったといった学校一般因子、家の手伝いをすると言われた、親が自分を理解してくれなかったといった親関

係や学校の行事などでみんなで行動するといった集団行動因子の比較においては雲南省の方が高いことが示されたことから、雲南省の学生は授業や教師との関係、親との関係などの日常でストレッサーになりうる出来事により多く経験していることが推察できる。学校でいじめられた、友たちとけんかをした、仲のよい友達とあることでうまくいかなかったといった友人関係では内モンゴルの方が高いことが示されたことから、内モンゴルの学生は友人との関係におけるストレスフルの出来事をより多く経験していることが推測できる。

また、ストレッサー強度では親が自分の要求を聞いてくれなかった、親にしかられたといった親との関係においては雲南省の方が高い。一方、先生から期待されるような成績が取れなかった、授業の内容がわからなかったといった学校内要因や学校の行事などでみんなで行動するといった集団行動因子、友人関係の比較においては両地域は差はなかった。このことから、内モンゴルと雲南省共に先生との関わりや授業関係及び友人との関係においてはあまり変わらない感じ方や環境にいることが推察できる。しかし、親に叱られた、親が自分の成績をかなり期待していたといった親との関係においては雲南省の学生がより多くストレスを感じていて、また、サポートも友人からのサポートは高いが親からのサポートが高くないことがストレス反応の「疲労感」について内モンゴルの学生より高く表出していると考えられる。

ソーシャルサポートの比較で父、母、教師からのサポートは内モンゴルの方が高いことが示されたことから、自分の悩みについて話し合ってくれるといった共行動的サポートとケガや病気のときに心配してくれるといった情緒的サポートなどの点で内モンゴルの親と教師がより学生達に関わっていることが考えられる。他方、友人からのサポートにおいては雲南省の方が高いことが示され、親、教師からのサポートが少ないものの横のつながりである友達同士で支えあっていることが特徴的といえよう。また、第3因子の現実的サポートにおいては母、教師、友人からのサポートが両地域では差がなく、父親では内モンゴルの方が高いことが示され、進路や勉強のことでのアドバイス、間違っているところ、悪いところを指摘してくれるといった現実的サポートは内モンゴルにおける父親のアドバイスや指摘が多いことが考えられる。

ストレス反応の比較では全般的に両地域は差がなかったが、下位尺度では、自分で自分が嫌になるといった自己嫌悪感が内モンゴルの方が高く、疲れやすいといった「疲労反応」では雲南省の方が高いことが示された。内モンゴルの学生が雲南省の学生よりストレス反応として自己嫌悪のような精神面で表出していることが特徴で、雲南省の学生は疲れやすいといった身体疲労で表出していることが特徴的と考えられる。これは、内モンゴルで

は友人からのサポートが少ないことから自己嫌悪が少し高くなっていることが推測できる。一方、雲南省では親からよりストレッサーを感じていて、親と教師からのサポートが低く、友人からのサポートが高いことでストレス反応として「疲労感」といった不特異なストレス反応となっていることが推測できる。

今回の結果は質問紙調査によるデータに基づく結果や考察であった。今後はインタビュー調査を取り入れて、学生達の現状をより個別的に捉えて、両地域の特徴をより詳細に検討することにより、中国の中学生の社会・文化的違いをストレス反応との関係について明らかにしたい。さらに、調査地域は二箇所だけであったが、中国は面積が広く、地域によって文化や習慣などいろいろな面で違いがあることから、調査地域も増やしてより地域の特性をみていく必要があるだろう。

付 記

本研究をまとめるにあたり、ご指導頂いた九州大学大学院人間環境学研究所教授針塚進先生、遠矢浩一先生に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 松崎多千代・小林真 (2004)：中学生の学校ストレッサーとストレスコーピングの有効性 友人ストレッサーと学業ストレッサーに注目して 富山大学教育学部研究論集, 7, 19-26.
- 三浦正江・坂野雄二 (1996)：中学生における心理的ストレスの継時的変化 教育心理学研, 44(4), 368-378.
- 永田雄子 (2005)：中学生におけるソーシャルサポートが及ぼすストレス軽減について 臨床教育心理学研究, 3, Vol.1, 31 No.1.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹波洋子・森俊夫・矢富直美 (1992)：中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- 岡安孝弘 (1992)：中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993)：中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 鉄拳 (2005)：中国内モンゴルの中学生の学校不適応とストレス反応の関連 未発表論文